

# 「漢語の拡大」用教材作り

山内 摩耶子

( 柏市中央公民館日本語教室 )

## 0 はじめに

1972年の国交回復に前後して始められた中国帰国者用日本語教育は、その後の大量帰国もあって、「ともあれ言葉の教育を」という目前の問題の対処という形で始められたものが少なくなかった。中国帰国者に必要とされる教育について知る時間もないまま、教師が自分の外国語学習の経験則によってさまざまな教育を行ったのは、従って仕方のないことではあった。そのような事情もあり、帰国者教育で言葉と同時に日本の文化や習慣を学習項目とすることは、最近ようやく共通認識となるに至ったと言える。たしかに教師が第2言語としての日本語( J S L )教育の理論を耳にしたのはここ数年ではなく、文化庁による指導者への研修や手引き書などで、早くから知識としては持っていた。しかし知識が中国帰国者教育での共通認識として確立されるためには、自分の行なっている教育を疑い、得た知識で洗い直す経験を大なり小なり現場がしなければならないという一定の時間が必要であった。

このような過程を経て現在、生活習慣、制度、就労など目的に合わせた多様な教育が行なわれ、その活動は新聞紙上や所沢の中国帰国者定着促進センターのニューズレター「同声・同気」にも紹介されるようになっている。従って J S L 教育の必要性を取り上げて言う必要はすでにない。しかし定住する外国人つまり移民という性格をもつ中国帰国者が、生涯使い続けることになる第2の母語として日本語を学習するのであれば、それは「今日のため」のサバイバル日本語だけでなく、「明日のため」の言語学習も必要なはずである。確かに帰国者の日本語力を「聞ける話せる」ととどめず「書ける読める」という段階まで視野に入れての教育を行なっているセンターもある。しかし読み書きという長期教育を行なうには条件が限られ、必要性を痛感しつつも適当な教材もないため、やむなく見送っているというのが多くのセンターの現状と思われる。そこで初級段階から始められる「明日のため」の教育

を考え教材作りを試みたところ、1つの形にすることができた。端的に言えば漢字圏学習者の利点を活かしての教育である。初級段階での教育であり、ある枠内での「読み書き」教育の準備段階的教育ではある。しかし初級段階でできる「明日のため」の教育は可能であった。またその教材作りは現場教師に可能であった。よって上の2点について報告する。

### **漢語拡大学習の必要性**

初級の漢字圏学習者から聞く言葉に「新聞は書いてあることは大体分かります」がある。日本語の機能として漢字が実質的な意味を構成する。つまり漢語が情報伝達を受け持つ(注1)。従って漢字を追うだけで大体の意味が取れるのは当然である。聞く力の不足している学習者にとって、来日直後から情報を得る手がかりを持っていることは大きな助けである。これは自国と漢字を共有する国に来た漢字圏学習者の強みである。当分学習は「聞く/話す」に集中できる。しかし中級に近い学習者からは「新聞でも学術書でも読めます、でも話せない」と「話したい」の希望を聞く(注2)。これは故国で高等教育を受けて来た学習者に多く見られるが、このような学習者は来日当初は「聞く話す」を中心に学習したが、(初級段階では漢字の音読み語自体が量も少なく、発音は漢字圏出身者として類推もきく上、教室の外での読解にも困らないことから)漢字音の発音はアイマイなまま済ませてきた結果と思われる。そのため日本語が上達し日常会話に困らなくなった頃になり、脳裏にある漢語が口には出ないことに気づくことになる。そして漢語を多用しないかぎり友人や上司との間では日常会話以上の会話は成り立たないことに思い至り、あらためて「(自分に見合った漢語を)話す」を希望するのだと思われる。どこの国であれ成人同士の知的会話での語彙の使い分けは文体との関連の中で行なわれる。言葉が出ずもどかしい思いのこの学習者も例外ではない。知的言語を求める度合いが大きくなった中級で、ようやくこの修辭学的選択が自覚され、同時に目前の障壁に気付いたということであろう。

ところで留学生の教育では中級に進む前に、下地作り教育として語彙の拡

大教育が必要と言われている。この場合、その語彙は外延の広い和語でなく漢語のはずである。それは明治期、近代日本語が漢字の組合せで抽象的な会話や作文で必要となる語彙を造った結果、漢語が現代日本語の教養や知識と深く関わるに至った（注3）という経緯のゆえである。その意味から一般的に「中級での語彙教育とは漢語教育」と言われることが理解できる。

JSL教育が第2の母語として日本人並みの日本語を身に付けさせることを最終目標としているならば、教育期間のどこかでいつの日か日本人と同じ日本語力が身に付くよう、そのための手当をしなければならないはずである。そしてその手当とは、将来までを視野にいれば当然、漢語の教育となる。ここで留学生の受ける教育と帰国者の受ける教育が漢語を接点として一致を見たが、漢語学習に関して2者を比べる時、帰国者側は漢字圏という強みゆえに多く留学生に先んじている。この強みを生かさないでいることは、欧米系留学生から見ればもったいない限りかもしれない。こう考えると帰国者教育が早くからの漢語教育を考えることは、あながち無謀とは思われない。帰国者の漢語力を欧米系留学生のそれと比較し、かつ帰国者の短い学習期間を考えれば、初級段階で考えられていい課題であると思われる。

日中両国での漢字の共有は諸刃の剣である。初期の「強み」は、のちに日本語力の伸びを止める命取りとなる。それは先の読解力と会話力のバランスを欠いた漢字圏学習者の例に見るとおりである。早期の読み書き教育は初級者の日本語全般への意欲を削ぎかねない危険もある。しかし手遅れになってからの帰国者個々の努力を思えば、教育側がその危険に陥らせない指導で、日本語漢語が聞き取れない／言えないという壁を上手に越えさせておくことはできる。最低自学方策だけ身に付けさせて送り出すだけでもいい。「読み書き」がJSL教育の生涯学習的教育という面での重要な活動である以上、試みる必要はある。

#### **高校教科書『現代日本の経済』（注4）による漢語の拡大**

教材として高校の教科書から現代日本の経済についての記述を選んだ。理

由は 日本人であれば当然持っている社会一般についての常識を帰国者が増やすことを視野に入れたとき、経済は宗教 / 歴史 / 政治より学習者の関心が高いこと。 日本経済50年を概観することは学習者の今後の生活設計の判断材料を増やすことになること、である。また教科書の通読は、個々の現象としてしか捉えていなかった経済上の動きに関係性を得させてくれる。同時代を生きた者は社会現象は1つ1つの事実として受け取っているのが普通である。帰国者にとっても事情は同じ、日本経済の諸現象はばらばらの事実ではないはずである。となれば産業界の「重厚長大」から「軽薄短小」への動き、過密 / 過疎問題、日米貿易摩擦など全てある必然の上にあったことを知ることは、むだな知識ではない。その意味で 教材の「学習者に知的興味を持たせられるものであること」という条件をも満たすと考える。以上、3点から『現代日本の経済』を教材化した。

ところでここで行なう教材化は原本である高校教科書から読解や練習問題作ることではない。文の書き直しである。一般的に文の難易とは文の長さ、長い修飾句、文末の複雑さが関係している。つまり本稿の教材化とは初級学習者が読めるように原文をやさしく書き直すことである。具体的にいえば初級文型への書き換えと名詞修飾節の解体である。このように初級文型による書き下ろし教材を志向せずあえて原文のリライトを試みるのは、読み書き準備段階のこの教材が、原文のリライトのゆえに読み書き教育へ繋がられる要素を含んでいるからである。また学習者が文法事項を教えるための他の要素を削ぎ落とした短文に慣れていると、長文(量的にも1文単位としても)に出会ったとき文脈が取れなくなるので、今から長文に慣れさせる意味もある。

### **「漢語の拡大」用教材作り**

すでに述べたように、本稿の目的は完成した教材ではなく完成までの作業手順の報告である。この単純な作業過程をあえてなぞるのは、単独での作業も、共同作業者が得られればその過程は作業数以上の能率で進むことを報告したいためである。

作業 1 : 『現代日本の経済』第 2 章 30 頁 (約 2 万 7 千語) のパラフレーズ

言語教育でリライトと称される原文の書き直し作業の中で、重層的に構成されたいわゆる「難しい文」を、構造的に易しく書き直すことを「パラフレーズする」と言うが、これを第 1 の作業として、高校教科書『現代日本の経済』30 頁をリライトした。これは初級日本語で学習される和語にではなく、漢語をそのまま残し、構造のみ単純にするパラフレーズの作業であった。主な作業は 連体修飾節のパラフレーズ 中級文型の初級文型への書き直しである。 連体修飾節は初級日本語の学習項目としてかなり早い時期から出され、学習者も短文中では理解できるようになる。しかし中級学習者にとっても、長文の読解や作文に際しての修飾節の扱いは依然かなりの時間をかけて学習されている。したがって当然パラフレーズされねばならない。この連体修飾節のうち、結び目となる名詞を持つ修飾節は、初級日本語教育で学習されているように作るのは容易、従って分解も容易である(注 5)。 は「...に対する」「...として」など複合格助詞の文の初級文型への書き換えと、主文副文から成る文などの構成が重層的な文章の単文への書き換えである。ここでは随時初級文型で学習されている「...の時」などの原文にない語を立てて書き換え、文意を通す方法を取った(注 6)。

受け身表現も教科書という性質上、「直接」受動の受け手から仕手への単純な交代で書き換えできない受動態(注 7)が多用されている。しかし主語の交代や新しく主語を立てるなどはむしろ複雑さを増す結果となることから、大半は原文に近い形にとどめた。使役文も出そのものは少なかったが、受身文と同じ扱いとした。 以上を通し、日本経済に関する高校教科書の記述 30 頁からリライト文 14 頁(注 8)を得た。

作業 2 : リライトした全文の漢字熟語を拾い出し頁毎に集計した。のべ語数 3 3 4 0、異なり語数 8 9 2 であった。漢語表として 50 音順にまとめた。なお経済に関係が深い国字の「働」(慣用音がある)や「株式」など(湯桶よみ)も 1 漢字熟語として取り上げた。

作業 3 : 本教材の異なり語数 8 9 2 語の頻度を調べ、頻度数 1 位から 30 位までを表にした。1 位は「日本」1 語で頻度数 74。30 位は頻度 8 で「農村」など 16 語。頻度数 8 までで合計 1 0 5 語である。頻度数 7 は 18 語。6 は 25 語。5 は 32 語。計 7 5 語である。(資料 1)

作業 1 ~ 3 を通し、日本経済 50 年を概観するのに必要な「日本」、「経済」、「産業」などの漢語が抽出された。パラフレーズは複雑な文を構造的にやさしく書き直すことであるから、漢字熟語で和語に形を変えたものはない。頻度数は多くの語で、原文に比べ大幅に増えている。これは修飾節を持つ 1 文を単文 2 個に分解すれば、結び目となっていた名詞は 2 個に増えることや、接続詞をはずした単文への書き換えは、そのつど主語を必要とすることなどが、頻度数の増えとなっている。

作業 4 : 頻度 1 ~ 30 位の 1 0 5 語および 30 位以下から分野 / 減少 / 原因 / 再建 / 過剰の 5 語、計 1 1 0 語を教育用漢語と設定した(注 9)。

作業 5 : リライト文 14 頁を適当な段落を選んで 11 週に分け便宜的に 1 1 週漢語拡大用教材と名付けた(注 10)。教材は 1 週分が平均 9 2 0 字となった。(資料 2)

9 2 0 字は初級日本語の読み教材としては上限の量である。しかし この教材は読解用としてあるのではない 戦後の日本経済もすでに 5 0 年の歴史を持ち概観できるためにはこれ以上は削れない、の 2 点から量はそのまま止め、学習者の内容理解のための負担軽減は別に考えることとした。

作業 6 : 学習漢語の週配分(資料 3 および 4)

週毎の学習漢語設定には次の 2 点を基準とした。 頻度順位が高いものから学習できること。 1 位 ~ 3 0 位の中での頻度順位は低くても当概頁で高頻度であること。しかし基準 が満たされたのは第 1 週だけであった。 に

についてはテキストの1項目が2頁 = 次週にまたがってしまい、その週での語の頻度が落ちるといことがしばしば出た。

#### 作業7：日本漢語と中国漢語の意味的対応しらべ

設定した学習漢語の日中の意味の違いの有無を調べた。本教材は日本語漢語の音読み学習のためのものであり読解を目的としていない。従って作業7は中国語で学習前に解説が与えられる教授者の下では必要ない。あるいは学習前に語彙の対訳表を渡すなどでもよい。

日本語教育指導書によれば日本語教育の基本的漢字音読語は、ある漢語の日中意味が同じかきわめて近い = S ( Same ) ある日本漢字語はそれと同じ漢字語が中国語に存在しない = N ( Nothing ) ある漢語が日中両国語で意味が異なる = D ( Different ) 日中両国語で意味が1部重なる = O ( Overlap ) の4種に分類され、Sが全体の3分の2、Nが4分の1である、とされている。この中でOは注意すべきであるがSと同じに扱って良い場合もあり、またOとNを合わせても(初級中級学習漢語として設定した2000語の中で)全体の10分の1に満たない、ということである。そこで第5週的全漢語の日中対応を調べてみた。大半がSとOであり、Nは会社、役員、土台。Dは株式、導入などであった。また高騰、機器、不況、直撃などは辞典に見出せないものの、その語の漢字の本来の意味と文脈から、何となく理解してもらえそうに思われるものも多くあった(注11)。

#### 作業8：リライト文の教材としての形作り(資料5)

「である」体を「ます」体書き直した。これは第1週から普通体の文は学習者には負担と考えられることから「ます」体と「である」体の2種のテキストを用意したということである。ここでは例として第5週用教材を載せてある。その週の学習漢語に太い下線、前週までの既習漢語には、ふりがなに細い下線を引いた「ます体」テキストを作った。アンダーラインの位

置を変えたのは、学習者が既習漢語と週の学習漢語を見分けるためである。

### 授業計画

本教材を利用しての教室活動を1例として示す。設定として学習時間1日150分 週5日の教育を行なう2次センター、学習者は30～50代の帰国者を主要メンバーとする。時間は金曜日の150分授業時間の中の90分を使い、次週の月～木曜日は毎日10分間の授業である。ここでは資料として第5週用教材を取り上げたのに合わせ、例を第5週と第6週にとる。

「漢語の拡大」学習予定表：

時間配分	月 10分	火 10分	水 10分	木 10分	金 90分
第5週	月～木曜日まで同じ				復習 今週の学習項目の確認 新出語説明 教師音読 学習漢語のかな振り ひたすら聞き／読み
第6週	第5週金曜日配布教材の音読 学習漢語ふりがな消し 教材の音読				簡単なテスト 第6週用テキスト配布 以下は第5週金曜日と同じ

#### 第5週金曜日

- (1) 4週までに学習した日本経済の流れをテキストとともに配布した資料のグラフの上で復習し、第5週の学習項目をグラフ上で確認。学習項目は1974年から80年代はじめまで
- (2) 規模の利益／コンツェルン／持株会社／ワンセットなどの語や略語（日教組、特需など）および6大企業集団について説明。教師の知っている範囲内の情報でよい。



(3) 教師はテキストをゆっくり読み、学習者に目と耳で内容を追わせる繰り返し返し聞かせる。学習者次第では内容について少し質問してもよい。

(4) 第5週用テキストの中文訳をくばり各自、内容を頭に入れさせる。

上の(2)と(4)は、先輩帰国者にたのみ中国語でテープに入れておいたものを学習者に聞かせてもよい。帰国者の教室は多様な学習者が混在し、中に高学歴者が1人ぐらいいるのが普通である。高学歴者にテープの説明や解説をしてもらいつつ帰国者にも各々の持つ日本経済の知識を披露させたりして、気のすむまで話し合わせる。教室内に経済について興味を持たない学習者がいても、次第に読む気になってくれるためには、中国語が飛びかうほどいい。教師は中国語が堪能であれば仲間入りする。できなければここに聞き、ときどき話の内容をたずねる。(教師に)教えることで学習者は発側に立つ。ふだん受け身の学習者もストラテジーを使って情報伝えするはずである。

(5) ふりがな付テキスト(資料5)をくばり、先に配布したテキストに各自でカナを振らせる。学習者次第でふりがなの量も場所も異なる少ない時間数を考えれば、資料5を前日に渡し一斉授業に入りたいところであるが我慢する。B氏は読める字までかな付であると読みづらいと言う。各自にかな振りさせるのは自分が自分のリズムで学習するのだと機会をとらえ学習者に自覚をさせる狙いもある。ただ書写に手間どる学習者には手をかす。

(6) 教師がゆっくり読み、息継ぎの部分に縦線を入れさす。

(7) 第5週の学習漢語10個を板書し、どの語からふりがなを消すかは自由だが、その週の学習漢語はテストすることを言う。一般的に帰国者はテストは嫌がらない。ただ量は学習者に合わせ増減する。

(8) 教師の後についてゆっくり読ませる。もちろんつかえて全部読めなくてもいい。あとは教師と級友の声を耳でとらえ目で字を追っていい。

第6週 月～木曜日（1日10分、4日間同じ内容である）

(1) 学習者といっしょに二三度読んだのち、学習漢語2個のふりがなを修正液で消させる。どの字を消すかは学習者の問題である。1個だけしか消さなくても前の週の（読めることになっている）漢語のふりがなが復活しても問題にしない。時間のあるかぎり多く読む。とはいえ漢語の拡大を学習項目としている金曜日以外は、長い時間かけることはたぶん許されない。多くても10分ほどかもしれない。しかしこの10分読みを根気よく続けさせれば、週末近くなると読みは驚くほど滑らかになるはずである。

教室でははじめから漢語の正確な発音やアクセントを求めない。発音/アクセントの正確さがこの教材の求めるものであるが「学期末までの継続」を優先する。の「教材の考察」で述べるが、ひらがなの「逐語読み」はむしろ母語の干渉を引き出す。従って多く読むということでは、学習者とは妥協しない。中国人にかぎらず外国人学習者に高低アクセントの上がり目/下がり目を意識させることは非常に難しいこととされている。1語1語の正確な読みで矯正するより、テープに取った早い速度の読みに合わせて読むほうが、アクセントの問題解決になるような気がする。まずは卓立の部分だけ強調して読めばテープの速度について来られるはずだからである。学習時間にゆとりがあるセンター個々に読む練習に入れるときは巡回し読みを聞く。学習者の発音やアクセントの質問にはこたえる。

第6週 金曜日

(1) 前半：聞き取りと発音に関する簡単なテスト。たとえば漢語のふりがなのテスト。教師が有気で読んでも無気で読んでも、まどわされず学習した通りのかなをふるように言う。

本教材は「今日のため」の学習用ではない。従ってテストも形成評価のためではない。大量のテキストの毎日の読みは、たどたどしい読みの段階にある学習者に楽しいはずはない。自分の知性に見合った会話と書きを（将来）我が物とする学習方法を知り、教室にいる間に経験させることができればよい。従ってテストはテストの教育的効果のためと教材の反省材料を得るためである。ただ学習者へのフィードバックは不足なく行う。

## (2) 後半：第6週用のテキストでの授業

第5週金曜日と同様の(1)～(8)を行なう。テキスト文の大量音読を取り入れるのは中級に近い学習者がいるときに行う。能力ある学習者は一層力を伸ばしてやりたい。このような学習者には日本語としての発音/アクセント/イントネーションの正確さを求める。

### \* 学期の後半の活動

学期の後半から宿題を出す。テキスト文の各行10回の書写である。1週の分量（平均 920字）を曜日数で割り、毎日1日分書いて来ることを課す。書くことで構文の理解を進めるためである。

後半からはテキスト文といっしょに原文も渡す。自宅でテキスト文と原文と両方に目を通すよう言う。忠実に実行すれば名詞修飾節のかかり方や主文副文の重層的な構成が分かってくる。また原文を先に見、意味が取れないときリライト文に目を向けるという順序に変わって来る学習者も出てくるはずである。これはすでに読む訓練である。このような学習者には漢語の発音学習が知らぬ間に読解学習へ進んだことを理解させ、学習期間後も同じ学習を続けるよう勧める（注12）。

学期後半、教師は学習者と一般日本人とのコミュニケーションの場を積極的に設ける。日本人の役割は話の聞き手としてである。従って教師の友人/家族/地域の人でよい。学習した漢語は使う機会がなければ剥落するが、その剥落を少しでもくい止めるためである。ここでは教師は場を設定するだ

けで後は帰国者と日本人に任せ、両者から助言を求められたとき関与する。

\* 学習漢語の強化について：

ところでこの教育は日本語漢字の音読みの徹底定着を目的とし、方法は課題文をひたすら読むだけである。つまり同じ読みを1週間繰り返すことで、その週の課題漢語たとえば「投資」の読みが定着すればいいとしている。これは仕事に疲れ、難しい予復習はする気になれない学習者用の教育として教材を作ったからである。しかし学習は強化を受ければ定着度を増す。そこで本教材の課題漢語も、学習者の重荷にならず強化できる道を考えてみた。

強化のための学習はいくつか考えられる。たとえば投資の同音異義語「闘志／透視／凍死」などの簡単な文を用意し、読み上げた文がどれかを当てさせる。日本漢語学習の困難の象徴のように思っていた同音異義語が、文脈があればさほど問題でないことを学習者は発見するはずである。強化は本来は教師の現場の状況に合わせての教案の範囲内のことであるが、ここでは強化の材料を同じ教材の中に求め試みた。

強化の材料とは、「投」および「資」が他の漢字と結びつき1語をなしても、「投」はトウ、「資」はシと発音される学習の材料を得るためであるが、「投」をトウ「資」をシと音読みするこの強化の学習が、学習者の漢字語彙を増やす道でもある。帰国者はセンタ - を修了し社会に出ても、初めは新聞の投手／暴投／資源などの1字だけの読みでしかない。しかしその後も教えられた方法、すなわち漢語を目と声と耳で捕え続けていけば、漢字圏学習者の壁（見ておおよそ理解できることや日本漢語を近似した音で発音できることから、発音に関心を欠きがちとなり、発音はあやふや、漢語の聞き取りは出来ない、したがって発話は和語ばかりという壁）は知らぬ間に乗り越えられるはずである。

そこで学習漢語と同じ漢字を頭に持つ語が892語中どれだけあるか調べた。623語あった。つまり892語中623語は頭の漢字が同じということである。892 - 623 = 269で、残る269の漢語は、従ってこの教材では1回しか使われていないということになる。この内訳を見ると14～5個同じ頭を持つ学習漢語は32種あり、合計語数は202。202 ÷ 32 = 6,3となり

1語は平均6個の同頭語を持つ。4～2個の同頭漢語を持つものは161種、合計語数は421。  $421 \div 161 = 2,6$ であるから、ここの1語は平均2,6の同頭語を持つ。つまりここから見れば1～30位の語であって、かつ同頭語を多く持つ漢語を学習することが、音読み漢語を増やすには効率のいい学習ということになる。作業4で頻度順位30位以下から5語を学習漢語として設定したのは、この5語が他の語より多くの同頭語を持つためであったが(資料4参照)、この5語を含め学習漢語のなかで同頭漢語を多く持つ語を強化用漢語として各週に配分すれば、効率のよい学習ができるということになる。

### 教材の考察

現在、教材を使用した結果を確かめられる場にはないので、かつての学生であった4人の帰国者に個々に会い教材を見せ意見を聞いた。同じことを聞いたのではなく、先の帰国者との話で解決したことは除き新たな疑問は加える方法をとった。意見を求めたかつての学生のうち、病氣療養中と病児の看護中である2人を除くと、会うことができたのは4人だけであった。従って数量的には評価としての信頼性は問えない。しかしわずかな人数ではあるが機会の少ない学習側からの意見ということと、意見がそれぞれの日本語学習歴を反映しているように思われるところから、経歴も一部紹介する。

- A氏 : 帰国1987年。2世。学習3か月で就労。自学で日本語。文革世代。  
B氏 : 帰国1989年。2世。学習半年。訓練校 就労。中国では電気技師。  
Cさん : B氏夫人。6か月修了直前に父親の看病で出国。近年再入国。  
D氏 : 帰国1987年。紀要2号投稿文のアンケートの中国語訳者。多くの困難を越え国立大学に在学中。(年令順)

なお4人の意見は太字で示し、質問および意見に対する筆者のその場での答は で、考察は【】で示した。

考察 1 - 学習者に意見を聞いて -

\* 教材として経済を選んだことについて： **日本経済発展の秘密は誰でも知りたいと思う、自分もこのテキストが欲しい** ( B ) **戦後日本経済が朝鮮特需から出発したことは知っている、経済は学習者に興味あるところが多い** ( A ) 【教材の選択はおおむね良好との感触が得られた。】

\* 帰国者用として合っているか： **ここに出た言葉を覚えたとしてもどこで使うのか** ( D ) **帰国者が漢語を多用できる環境は今はないが将来の使う機会に備えていまは自分自身を太らせる。発話に漢語の語彙量が問題になるときが来る。つまりこの教材はもともと初級者の今のためのものでない。経済の学習はクラス全員のニーズだろうか** ( D ) **多様な学習者が混在する帰国者教育では一斉授業という形式ではできないことも多い。自習時間をコースとして設置したクラスで使うなど工夫が必要。【「明日のため」の教材は学習者の興味の差を考えて分野別に作成が必要。】**

\* 初級という段階で使えるか： **1週で進む量が多すぎる** ( D ) **1週分が920字は確かに多い。ただ第1の目的は文の読解ではなく正確な発音。目の前の漢語を自分の耳と口で捉える練習ができればいい。テキスト全文学習はムリ、一部でいい** ( A ) **テキスト見て今は内容も分かるが(初級ではどうか?)** ( B ) **やる気を無くさせない工夫が必要。また学習者にやりたい所を選ばせることも必要。【多量(14頁)の教材は初級では疑問あり。】**

\* その他の問題：

転移(母語の干渉)： **中国人は漢字が多いことは抵抗がないが漢字を読むときは中国発音が出る** ( A ) **はじめからの漢語1語1語の正確な発音は求めない。目でテキストを追いつたすら聞くだけ。教師の読む日本文のイントネーション、卓立など韻律的部分を体に浴びてもらう。【教材の目的の第1は「受容」で漢語の視覚像と聴覚像の一致ができればいい(注13)。】**

**日本漢語と中国漢語は80%意味は同じ** ( A ) **日本漢語に相当する中国漢語がないものや意味が異なるものは語彙表を渡す。【文意は与えた中文訳の**

自宅での一読と眼の前のテキストを見ていればやがて通じる。その時期は学習者によって当然違ってよい。精読教材ではないのでそれ以上は求めていない。】

同音異義語： 日本語は同じ発音多いから（この教材に出た漢語の発音を覚えても）聞いても分からない（C）【教師は次の abcを行なう。 a教材の教育漢語を書き出す -bそれと同音の漢語を先に出した教材の漢語と並記する -c並記した漢字熟語で作文する。この abcを板書する。文脈があればほとんど問題でないことが学習者に分かる（注14）。】

考察 2 - 学習者の朗読テープから -

\* わかち書き：テキスト文朗読に際し録音の許可を得た。帰宅後 B 夫妻のテキスト文朗読部分を聞いた。現在生活での「聞く話す」には不自由しないものの、まとまった日本語学習も在日期間も少ない C さんに見られる特徴は、1 拍分にならない長音促音と、漢語の最後から 2 つ目が最も高く最終拍へ下がる発音であった。これは中国人に共通とされるが、4 音節名詞が多く後ろから 3 字目に滝の部分があること（注15）と、日本語アクセントの語の意味を区別する機能を考えると、中国帰国者の発音指導ではこの転移が課題と思われたが、これを結果的に助長したのが本教材のわかち書きであった。つまり数個続くふりがなの読みにくさに配慮した「企業 集団」のわかち書きが、結果的に C さんの「キギョウ、シュッダン」と「ヨ」「ダ」を高く発音する過ち = 1 熟語に滝 2 つつまり 2 語に聞こえる過ちを生んだ。これから言えば、テキスト作りでは朗読文と下のふりがな部分では活字のポイント数を変え、複合語のわかち書きはしないほうが良いということになる。

一方 B 氏の朗読では読み初めの中国発音が同一語が繰り返し出るうちに日本発音になったこと、4 字漢語のわかち書きの 2 語読みがほとんど見られなくなったことが、C さんと比べ顕著であった。後日理由を尋ねたところ初めは漢語の下のカナを読み、発音の分かった語はひらがなを見ないで読んだという。つまりカナを気にした結果、中国発音が出たということである。また「ワープロ（の検索）で漢語（の発音）を覚え」て、すでに読める字が他の 2 人に比べ格段に多かったことも、朗読の緊張を解くのに幸いしていたかも

しれない。4字漢語のふりがな処理は教材の弱点と思われたが、Bさんの朗読を聞く限り、卓立の問題はわかち書きの検討より「ひたすら聞き／ひたすら言い」で片づきそうに思われた。

### 考察3 - 製作者として -

\* どの教師が行なっても同じ結果が得られるか： \* 教材の最終目的である読み書きの自学方法が身に付くか：この2点の考察が残されているが、現在検証の場がない。は先のプログラム例での授業をどこかで試みて頂く以外方法がない。もと同じように教室活動をとおし検証するしかなく、また自学方法が体得されたかについても長期の追跡調査が必要であり、現時点での考察は不可能である。

### おわりに

欧米系学習者の書く漢字には、一般的には考えられないような誤りを見ることがある。これは扁や旁を通して漢字を学習すればある程度避けられる誤りであるが、「待つ」が「侍つ」になるなどの字に接すると、漢語拡大教育での漢字学習に費やす非漢字圏学習者の時間と労苦を思わずにはいられないが、それに対し帰国者は漢字圏というメリットゆえに、いくつかの壁を何なく越えることができる。それは語彙の量的習得に限らない。読解についても同様である。漢語の日中意味が同じものが多いことに助けられ、帰国者は漢語を含む文の音読を長期に続けていれば、それだけで読んでいる文のタイプ - 軽い読物か解説文か - までも何となく分かってくる。漢字の表意性が、初見の熟語をも一瞬のうちに既知の語とさせてくれるからである。このようなメリットのゆえに、帰国者は将来まとまった教育の機会が得られなくても、本来的読みの形は十分身に付けることが出来るはずである。

本教材はしかし、音読そのものは難しい教育ではないとはいえ、学習者の興味や中国での学習歴を問題にしないですむという点では、一定の枠があった。つまりこの教材は、まずは自国語での会話では知性に見合った語彙を選べる高学習歴の帰国者用であった。また教材の量からくる学習者の心理的負



担についても配慮は薄かった。興味やニーズに対応できる分野別の教材の開発と教材の量の問題、この2つは今後の課題である。

読み書き能力を身に付けなければ帰国者の労働の質的向上は望めない。また家庭の教育的環境が次代を作る。たしかに外国語力はその学習者の言語生活の延長線上にあり、読み書き教育は「聞く話す」教育以上に、学習者の適性が考慮されねばならない。しかし成人学習者の興味やニーズに合わせられるほどの教材があれば、それが読み書き能力を伸ばし、いつの日か帰国者すべてが日本語で「読み書き」できる日が来る、と考える方が教師の性には合っている。分野別の多種多様な教材の開発が進むことが望まれる。

以上

## 注

- 1) 『日本語はどう変わるか』146頁 では漢語を抜き取った文を使い、文章独自の意味内容を作る漢語の情動的機能を、和語の文の骨組を作ったり文章の運びを維持する働きと対比して示している。
- 2) 柏中級日本語教室でもニーズの第1は「自分の意見を言いたい」である。また希望の第2は「新聞が読めるようになりたい」である。この2つの希望は日常でも漢語なしには言語生活は成り立たないことをも示している。
- 3) 『日本語と日本語教育 - 語彙編 - 』10頁では現代雑誌の用語(約4万語)の調査では漢語は異なり語数の約半分を占め、雑誌の種類別では評論、文芸、通俗科学自然科学などに多く、したがって抽象的哲学的分野では、漢語がなければ情報伝達はできないと述べられている。
- 4) 宮本憲一他(H4) 『新版高校政治・経済』第2編 第2章「現代日本の経済」実教出版
- 5) a私はお菓子を食べました。京子さんがお菓子を作りました。  
b私は京子さんが作ったお菓子を食べました。  
上の aの2つの短文は「お菓子」を結び目にして bの連体修飾節を持つ一文にすることができる。従って原文の「当時の農業は零細経営を主体とする地主制であった」は「当時の農業は地主制であった。地主制は零細経営を主体とした(する)」とパラフレーズできる。
- 6) 教科書の一文を例とする：「国民総支出の配分を見ると、個人消費の割合が小さく、設備投資の割合が大きい」「国民支出の配分を見たとき次のことがわかる。...個人支出の割合が小さい。設備投資の割合が大きい...。」
- 7) 直接受動のような動作主が特定個人ではなく、事物や物を主語とする受け身表現 = 「テストは9時から行なわれた」
- 8) 原文の写真/グラフなどを除いた本文だけのリライトのため、頁数は少なくなっている。
- 9) 学習漢語数を何個とするのが適当かは、レベル差をはじめ多くの多様性を持つ帰国者教育では決めることができないが、次頁の表を漢語数設定の参考にすることはできる。(順位毎の漢語と頻度は資料1参照)

順位	延べ語数	延べ語数累算	カバー率(%)	10%上げるための必要数
1 ~ 5	314	314	9,5	10%学習には5語
6 ~ 10	188	502	15	20%には10語
11 ~ 15	149	651	19,5	計15語を学習
16 ~ 20	117	768	23	
21 ~ 25	107	875	26	30%には15語
26 ~ 30	98	973	29	計30語を学習
31 ~ 35	80	1053	31,5	
36 ~ 40	75	1128	33,7	
41 ~ 45	70	1198	35,8	
46 ~ 50	64	1262	37,8	40%には25語
51 ~ 55	60	1322	39,5	計55語を学習
56 ~ 60	56	1378	41	
61 ~ 65	55	1433	42,9	
66 ~ 70	54	1487	44,5	
71 ~ 75	50	1537	46	
76 ~ 80	50	1587	47,5	
81 ~ 85	45	1632	48,8	50%には40語
86 ~ 90	44	1676	50	計90語を学習
91 ~ 95	40	1716	51,3	
96 ~ 100	40	1750	52	
101 ~ 105	40	1790	53	55%には20語
106 ~ 110	29	1825	54,6	計110語を学習

表に見るように学習者に合わせ、学習漢語を設定することができる。例えば55個の漢語学習が適当と思われれば、資料1で頻度26位の「大量」までを学習すればよい。55語の学習によりカバー率39,5、すなわち本教材の

約40%の語が読めるようになる。

- 10) これは最初、中国帰国者定着促進センタ - 紀要 3号の拙稿のカリキュラムで設定した時間数に依拠して始めた。しかし11週では初級学習者には無理と気付いた。ただ第 8 週以降のテキストはパラグラフの関係で頁数が第 7 週までの 1.5倍となっており11週以上に広げることが出来るので、11週以上に広げる作業は省略してある。
- 11) 上述の指導書に収録されている語が少なく、残りを辞書で調べたがOかSかどちらに分類すべきか判断できない漢語が多くあった。また上下入れ代わった鉄鋼(日) = 鋼鉄(中)、軽減(日) = 減輕(中)などの扱いも中国語の知識がないため1人で決めるには荷が重すぎた。
- 12) 修了生が働きながら日本語学習続けることも職場や近隣で漢語を多用して話す機会もそう多いとは考えられない。センタ - が修了前に以下のようなことを頼める日本人を帰国者に紹介する。帰国者が漢語を多用できる話題を提供し話相手をしてくれる人。帰国者の「多読」学習の手伝いをしてくれる人。すなわち「どんなことが書いてあるか大意をとるスキミング」「斜め読みのスキヤニング」「自分の持っている情報と合わせるマッチング」など、読み方の最も一般的な読みができるよう手伝ってくれ、時には新聞の切り抜き記事などで読めない漢字をその場で教えてくれる人。この教育では帰国者も日本人もどちらにも準備は必要ない。長く継続されることがこの教育の第 1 条件である。
- 13) 『日本語教授法の諸問題』4 頁によれば正しい読解とは文字 記述像 聴覚像 概念という経路を通るものであり、その読解を可能にするものが音声言語の十分な学習であるとされている。また文字を交通標識のような視覚表徴として捉え、直接概念と短絡させる危険も述べられている。中国人学習者が文章に接した時、文字 記述像 母語の経路でいわば翻訳を行い聴覚像を欠くことは、聞く話す能力ばかりでなく読解としても不全ということになる。外国語教育ではその国の言葉で考えるように言われ、文を頭から音読し理解していく学習をさせられるが、これも視覚像を反射的に音声表象に再生させる正しい読解を学習しているということであろう。
- 14) 日本漢語の同音異義のほか複数音読みを問題にする学習者もいるが、80

%が漢音の語であり、複数の音読みを持つ語もそう多くはない。呉音なども使われる範疇は仏教関係などに限られている。1語1音読みの語だけを選んでおしえればいい。

15) 漢字2字でできている4音節名詞は平板型が圧倒的に多い。『音声と音声教育』79頁90頁

### 参考文献

- 相浦 果(S 59) 「日中対照語彙論」『日本語と日本語教育 - 語彙編一』文化庁  
石田敏子(1986) 「英語・中国語・韓国語圏別日本語学力の分析」『日本語教育』58号 日本語教育学会  
樺島忠夫(1988) 『日本語はどうかわるか』岩波新書 岩波書店  
樺島忠夫(S 59) 「基本語彙」『日本語と日本語教育一語彙編一』文化庁  
岸陽子 (1969) 「接尾辞“的”と中国語」『講座日本語教育』第5分冊 早稲田大学語学研究所  
北条淳子(1974) 「連体修飾構文」『講座日本語教育』第10分冊 早稲田大学語学教育研究所  
木村宗男(S 59) 「読解の指導方法」『日本語教授法の諸問題』文化庁  
木村宗男(1970) 「読解指導について」『講座日本語教育』第6分冊 早稲田大学語学研究所  
窪田富男(1976) 「語彙力について」『講座日本語教育』第12分冊 早稲田大学語学研究所  
駒井 明(1990) 「上級の日本語」『日本語教育』71号 日本語教育学会  
坂倉篤義(S 59) 「日本語の語彙」『日本語と日本語教育 - 語彙編 - 』文化庁  
斎藤修一(1987) 「新教科書論」『日本語教育』59号 日本語教育学会  
志柿光浩(1992) 「経済学専攻の非漢字圏学習者にはどんな漢字を教えればよいか」『日本語教育』76号 日本語教育学会  
武部良明(1979) 「漢字の読み方について」『講座日本語教育』第15分冊 早稲田大学語学研究所  
田中 望(1990) 『日本語教育の方法 - コースデザインの実際 - 』大修館書店  
寺村秀夫(S 58) 『日本語の文法(下)』国立国語研究所  
肥田野直(1991) 『教育評価』放送大学教育振興会  
文化庁(S 59) 『日本語教育指導参考書1 音声と音声教育』  
宮本憲一他(H6) 『新版 高校政治・経済』 実教出版株式会社

資料1 「日本の経済」の漢字熟語（異なり語数）892語から  
頻度数74～5までの漢字熟語を抽出する

頻度数1位～30位（103個あり） (74) (8)				頻度数30位以下 (75個あり) (7～5)	
1	日本	74	26	消費	12 7語あり
2	経済	70		自動車	12
3	産業	65		開発	12
4	...化	54		機械	12
5	成長	51		東京	12
6	第...	39 2語あり		大量	12
7	財政	39	27	...率	12
8	企業	38		...面	11 13語あり
9	大...	36 2語あり		特徴	11
10	生産	36		公債	11
11	...的	35		以降	11
12	高度	33		...圏	11
13	都市	28		革新	11
14	国際	27		格差	11
15	...力	26		基盤	11
16	問題	24 2語あり		欧米	11
17	税	24		集中	11
18	金融	23 3語あり		戦前	11
19	投資	23		人口	11
20	地方	23		輸出	11
21	農業	22 2語あり	28	変化	10 11語あり
22	技術	22		発行	10
23	中小企業	21		民主	10
24	政府	21 2語あり		約...	10
25	労働	21 2語あり		...性	10
26	所得	20		上昇	10
27	経営	19		市場	10
28	改革	18		社会	10
29	生活	17 3語あり		事業	10
30	資本	17		計画	10
31	戦後	17		不況	10
32	工業	16 3語あり	29	主義	9 9語あり
33	地域	16		革命	9
34	中心	16		...金	9
35	目的	15 6語あり		住宅	9
36	拡大	15		情報	9
37	...期	14		先進国	9
38	危機	15		労働者	9
39	構造	15		...法	9
40	交通	15		課題	9
41	交通	15	30		16語あり
42	年代	14 5語あり		農村	8 後半 8
43	農家	14		貿易	8 外国 8
44	発展	14		比重	8 銀行 8
45	公共	14		重化学	8 時代 8
					頻度7 18語あり
					一般 国土
					関係 収支
					環境 集団
					基本 支出
					巨大 諸国
					供給 総合
					競争 必要
					向上 不足
					軍事 方法
					頻度6 25語あり
					維持 形成
					改善 今後
					導入 事務
					分野 再建
					株 食料
					株式 直接
					...型 賃金
					兼業 土地
					減少 保障
					原因 民間
					公害 抑制
					傾向 理由
					国家
					頻度5 32語あり
					以下 進行
					確立 促進
					...円 素材
					意欲 水準
					株価 通信
					過剰 低下
					研究 対外
					系列 鉄鋼
					自治 地価
					国内 人間
					自由化 負担
					実施 農地
					需要 配分
					製品 補助金
					整備 摩擦
					深刻 ...量

25	国民	14	4 語あり	制度	8	価格	8	
	設備	13		証券	8	全体	8	
	政策	13		資金	8	自由	8	
	世界	13		...者	8	巨大	8	
	石油	13						

## 資料2 「11週教材」のリライト文 第5週テキスト

(参考として第1頁の第2パラグラフまで)

### \* 企業の巨大化と大企業集団の形成

重化学工業化がすすんだ。企業は大規模な設備を建設して、大量生産方式をとった。研究開発は多額の費用がかかったが、企業は研究開発をおこなって、「規模の利益」をあげた。こうして資本と生産の巨大な集中がうみだされた。企業規模の巨大化がすすんだ。巨大企業は、上位数社で生産の90%以上を占めるような独占的な力をもった。このような世界有数の巨大企業が、各分野につくりだされた。

巨大企業は、巨大銀行を中心に同系列の大企業集団を形成した。こうして寡占体制が強くなった。コンツェルンというのは、戦前の財閥のように持株会社(財閥本社)を頂点に立てる。縦系列で支配する。今の大企業集団は、コンツェルンではない。企業相互の株式の持ち合い、役員の相互派遣、社長会での調整などの、円環状の組織となっている。戦前の財閥は、それぞれ特定の産業にかぎられていた。戦後の企業集団は「自動車からラーメンまで」といわれるように、たいいてい分野を含んでいた。「複合の利益」を求めて「ワンセット主義」をとる。巨大銀行が集団の中核になって、系列融資をおこなう。流通面では、総合商社が中心となっている。こうして、6大企業集団(三井・三菱・住友・富士・三和・第一勧銀)のほか、いくつかの企業集団が形成された。

### 資料3 目次と 学習漢語(参考として第5週のみ)

第 5 週	* 企業の巨大化と大企業 の形成	7企業2 25石油3 28不況6 8大...10
	轉換期の日本の経済	23危機2 23目的2 26大量5 26...率
	* 石油危機と高度成長 のおわり	30巨大2 32分野5
	* 貿易摩擦と円高不況	強化用漢語 16

第5週の目次右側の学習漢語の前後の数字は以下の意味である。

(例) 28 不況 6 「不」の付く漢語が教材の中に、「不況」を含め  
6個あることを示す。従ってこの「不」を「不況」  
頻度順位 学習漢語 という読みの強化用に使うことを示す。



資料4 学習漢語としての110語の設定と各週への配分

(延語数3340中1799語をカバー)

順位	数	強化用漢語数	配分の週	順位	数	強化用漢語数	配分の週
1	日本 74	3	1	26	消費 12	2	8
2	経済 70	4	1		自動車 12	14	10
3	産業 65	1	1		開発 12	2	10
4	...化 54	1	2		機械 12	4	6
5	成長 51	1	2		東京 12	4	9
					大量 12	5	5
6	第... 39	1	1		...率 12	1	5
	財政 39	5	11	27	...面 11	1	6
7	企業 38	2	5		特徴 11	7	1
					公債 11	7	11
8	大... 36	10	5		以降 11	6	6
	生産 36	4	2		...圏 11	1	10
9	...的 35	1	2		革新 11	2	6
10	高度 33	5	2		格差 11	2	7
11	都市 28	2	9		基盤 11	5	3
12	国際 27	10	2		欧米 11	1	7
13	...力 26	1	2		集中 11	5	8
					戦前 11	3	2
14	問題 24	1	9		人口 11	4	9
	税 24	4	11		輸出 11	3	3
15	金融 23	4	10	28	変化 10	3	4
	投資 23	3	3		発行 10	5	11
	地方 23	6	11		民主 10	4	1
16	農業 22	14	8		約... 10	1	2
	技術 22	1	6		...性 10	1	7
17	中小企業 21	10	7		上昇 10	5	4
	政府 21	3	7		市場 10	3	3
18	労働 21	2	2		社会 10	3	7
	所得 20	3	11	29	事業 10	6	4
19	経営 19	4	8		計画 10	1	10
20	改革 18	2	3		不況 10	6	5
21	生活 17	4	8		主義 9	6	3
	資本 17	3	1		革命 9	2	6
	戦後 17	3	2		...金 9	4	11
22	工業 16	4	1	30	住宅 9	5	9
	地域 16	6	10		情報 9	1	10
	中心 16	10	10		先進国 9	2	7
					労働者 9	3	6
					...法 9	3	11
					課題 9	2	7
					農村 8	14	9
					貿易 8	1	3
					比重 8	3	4

23	目的	15	2	5	32	重化学	8	5	4					
	拡大	15	1	6		制度	8	5	11					
	…期	14	1	9		証券	8	1	10					
	危機	15	2	5		資金	8	3						
	構造	15	1	4		…者	8	1	4					
	交通	15	3	9		後半	8	1	9					
24	年代	14	3	8		外国	8	3	7					
	農家	14	14	8		銀行	8	1	10					
	発展	14	5	1		時代	8	3	9					
	公共	14	7	3		価格	8	2	4					
	国民	14	10	1		全体	8	4	6					
25	設備	13	2	3		自由	8	8	8					
	政策	13	3	4		巨大	8	2	5					
	世界	13	3	7		分野	6	5	5					
	石油	13	3	5		減少	6	6	8					
						原因	6	6	3					
										33	再建	6	5	6
											過剰	5	7	8

資料5 第5週用テキスト(丁寧体)

(参考として第1頁のみ)

\* 企業 の 巨大化 と 大企業 集団の形成  
 きぎょう きょだいが だいきぎょう しゅうだん けいせい

重化学 工業化 が進みました。企業 は 大規模な 設備を建設して、大量  
 じゅうかがく こうぎょうか すす きぎょう だいきほ せつび けんせつ たいりょう

生産方式をとりました。研究開発には多額の費用がかかりましたが、  
 せいさん ほうしき けんきゅう かいはつ たがく ひょう

企業 は研究開発をおこなって、「規模の利益」をあげました。こうして  
 きぎょう けんきゅう かいはつ きほ りえき

資本と生産の 巨大な 集中が生み出されました。企業 規模の 巨大化 が  
 しほん せいさん きょだい しゅうちゅう う きぎょう きほ きょだいが

進みました。巨大企業 は上位数社で生産の90%以上を占めるような  
 すす きょだい きぎょう じょうい すうしゃ せいさん いじょう し

独占的な力をもちました。このような世界有数の 巨大企業 が各分野に  
 どくせんてき ちから せかい ゆうすう きょだい きぎょう かく ぶんや

作り出されました。

つく だ

巨大企業は、巨大銀行を 中心に 同系列の 大企業 集団を 形成 しまし  
きょだい きぎょう きょだいぎんこう ちゅうしん どうけいれつ だいきぎょう しゅうだん けいせい

た。こうして寡占 体制が 強くなりました。コンツェルンというのは、持株  
か せん たいせい つよ もちかぶ

会社（財閥 本社）を 頂点に 立てます。縦系列で 支配します。戦前の  
かいしゃ ざいばつほんしゃ ちやうてん た たてけいれつ し はい せんぜん

財閥はコンツェルンでした。今の 大企業集団は、コンツェルンでは ありま  
ざいばつ いま だいきぎょうしゅうだん

せん。企業 相互の 株式の持ち合いや 役員の 相互 派遣、社長 会での 調  
きぎょう そうご かぶしき も あ やくいん そうご は けん しゃちやうかい ちやう

ふりがな：

第 5 週の学習漢語は太い下線

第 4 週までの既習漢語はふりがなの下に細い下線

下線のないふりがな付の漢語は、5 週以降の学習漢語か

あるいは学習漢語として本教材では設定されていない漢語